研究を肌で感じて、仲間と出会って、悩むと決めたインターンシップ

東京理科大学理工学部応用生物科学科３年　平川健
（配属先：染色体分配研究チーム）

「インターンシップ」という言葉を学校で耳にするたびに自分は焦っていました。大学院に進学することは決めていても、それは漠然としていて、周りで就職活動の準備をしている同期の姿を見ると「自分は遅れているのではないか?」と感じていたからです。なので、この理研 CDB が主催するインターンシップの存在を知ったとき「行くしかない!」と強く思いました。

このインターンシップでは研究室での実習、先生方の講義、施設見学、そしてオープンラボなどを通して、最先端の研究現場を肌で感じることができました。研究室での実習では同じ研究分野に興味を持った同世代の方々と毎日朝早くから夜遅くまで実験をし、結果について討論しました。また、チームリーダーの方とも意見交換をして、議論を深めました。最終日には実習についてのプレゼンテーションを行いましたが、どのチームもチームワークが抜群で情熱が爆発していました。

自分はこのインターンシップに参加する前は、研究とは華やかなものだと思っていました。しかし、実習を通し、研究とは地道なことの積み重ねだということを実感しました。例えば、自分は染色体の動態をイメージングすることばかり考えていましたが、そこに至るまでの過程、細胞の回収、洗浄、そしてマイクロインジェクション。どれも慣れなければ非常に手間取る作業で、正直、心が折れかけました。けれども、普段学校で行う「学生実験」ではどれも体験できないことであり、またその過程を乗り越えた後にイメージングした染色体の動態には本当に感動しました。

また、情熱的な志をもつ同世代の学生と出会えました。一人一人が生物に対して熱い思いをもっていて、普段会うことのない、初対面の人同士がそれについて語り合うというとても刺激的なことが毎日のように宿舎、施設、そして研究室内で行われました。さらに、この学生の間にチームリーダーや研究員の方々も加わり、本当に貴重な時間を過ごせたと思います。特にチームリーダーの方々には、自分の研究に対する思い、悩みについて丁寧に意見・アドバイスをしてくださり、大変感謝しています。このインターンシップで知り合い、語り合い、そして議論し合った仲間との輪を大切にしていきたいと思います。もし、研究の場で再会したら…と思うとドキドキが止まりません。

このインターンシップは言葉では言い表せないぐらい素晴らしかったです。参加する前に「自分は遅れているのではないのか?」と不安でしたが、今は「悩みに悩み抜く!」とポジティブに前を向くことができています。本当に一生忘れることのできない 5 日間でした。最後に、チームリーダー・研究員の方々、このインターンシップで出会った熱い思いをもつ同世代の仲間、そして事務員の方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

研究発表会で質疑応答に対応する平川健さん（左）